

The
Japan
Interior
Designers'
Association

JID

no. 71 1975.oct.1

昭和49年度協会賞 選考にあたって

選考委員長

長 大作

昭和49年度協会賞授賞者

生活史研究所代表 小泉和子氏

浦辺建築事務所代表取締役 浦辺鎮太郎氏

工作社社長 山本夏彦氏

協会賞も今年で6回目、延20人の方々が受賞されたが、会員のなかから一人も受賞者が出なかったのは1971年について2回目であって、お互いに大変残念なことである。石油ショックのあおりで、良い仕事をする機会が少なかったということでもあるのだろうか？

今回の協会賞は、生活史研究所代表小泉和子氏、浦辺建築事務所代表取締役浦辺鎮太郎氏、(株)工作社社長山本夏彦氏の三氏に差上げることになった。

小泉和子氏の場合は「日本の家具の歴史に関する調査・研究」というテーマのもとに、長期間にわたり行われた、こうした地道な調査・研究は、家具に関する

伝統の少ない日本に於て誠に貴重なものであって、これが「家具の歴史館」の創設につながった功績は大であった。小泉氏は雑誌「室内」に研究の成果を連載しておられるが、今後も単行本としてまとまった出版がなされることを期待したい。

浦辺鎮太郎氏に対しての協会賞は「アイビースクエアーのインテリアデザイン」についてである。インテリアデザインの発達について考えてみると、新築工事に伴うものが多いことは勿論であるが、欧米に於ては石造・煉瓦造等の既存の建物の内部を改装することによって盛んになってきたと思われる。壊れやすく、壊しやすい木造建築を主としてきた日本に於

ては、近頃では鉄筋コンクリートの建物でさえも壊されて建替えられるような状況で、インテリアデザインの十分な発達になされなかったと考えられる。そのような状況のなかで、古い煉瓦造の工場を改修して、これをおよそ考えもつかない「ホテル」という形で上手に生かし、かつ従来のイメージをこわさないように改築したところが誠にユニークであると思つた次第である。

さらに浦辺氏は、倉敷の伝統的な町並みの保存についても、市当局、倉紡などと協力して一方ならぬ尽力をされている。

なお、氏はたまたま時を同じくして日本建築学会賞も受賞された。

山本夏彦氏については、「雑誌「室内」の20年に渉る出版活動」ということに対して特別賞を差上げることになった。各分野において専門誌のもつ役割は非常に重要かつ困難な中で、20年に渉る編集活動は誠に貴重なものである。丁度20年という切りを考えて特別賞とした。

たゞ、かねがね感じていたことで残念なことは、「室内」誌の編集がヴィジュアルな面でまことに垢抜けないことで、このことはたゞ「室内」誌のみではなく、家具、インテリア関係の各専門誌の殆んどが同様で、諸外国から送られてくる各種雑誌と比べて「雲泥の差」といってよいと思う。掲載される広告のデザインも含めて、もっと神経を使って、国外に出しても恥ずかしくないものにしてほしいものである。

答えを..

生活史研究所代表

小泉和子

大川の木工指導所の技師だった河内諒さんが、指導所をやめ、大川に住みついて諒畔塾をつくり、若い職人達を指導したことが種となって、今日の大川家具の隆盛をもたらした、ということは、家具関係者にはよく知られている。戦前は東京府立工芸の木曾恕一さんが似た役割を果たしていたようであるが、各地を調査していると、その土地に、何か特徴ある産業がある場合、きまって、こういう河内さんのような師祖とも云うべき篤業の指導者が居たことがわかる。

勿論、河内さんや木曾さんのようなはじめてから指導的立場の人もあるが、それより、純粹の民間人で、自身職人であったり、経営者であり乍ら、業界の指導者として、尽した人が多い。

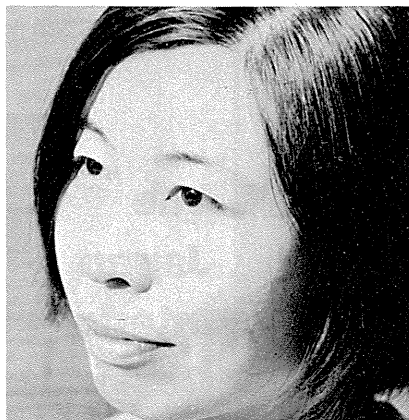
昨今の、利権目当ての商工会会長などとは全く違う、責任と信念を持って一種求道者的に技術の伝達指導をした人が各地に居たのである。

例えば、桐簞笥の松本朝之介さんなどもそうであり、仙台簞笥の門馬民造さんもそうである。共に故人だが、私は門馬さんには10数年前、会っている。

仙台簞笥が時代遅れになって困って東京の松本さんに来てもらい、桐簞笥の講習会を開いて、新しい技術を仙台の職人達に教えてもらったという。寒い時だったが、朝早くから遅くまで、非常に熱心に教えてくれて行って、その後も、こっちへ来る時は寄って見ていってくれたものです、と厚い感謝と尊敬をこめて語る門馬さんも、又仙台の責任者として苦闘して来られた人である。信頼の美しさにうたれた。

酒田でも松本さんのことは語られている。自転車で職人の家をまわって、手にとって教えてくれたと、老人は懐しがっていた。

職人の技術の伝達については、古来秘伝とか、盗むとか、いぢわるということを開くように、決して、いつもこんなに明るかったわけではないだろう。しかし、そんなに暗いものばかりで、日本の技術が伝わって来たものでないことも確かであ



る。常に、こうした広い心と目を持った人が居て、今日まで伝わって来ているのだ、ということを、私は各地を歩いていて肌身に感じている。

その門馬民造さんに「どうか簞笥のことを、よく調べておいて下さい」と云われた。

以上が「どうして、家具の歴史なぞ調べる気になったのですか」とよく聞かれることの、答です。

謝辞と感想

浦辺建築事務所代表取締役

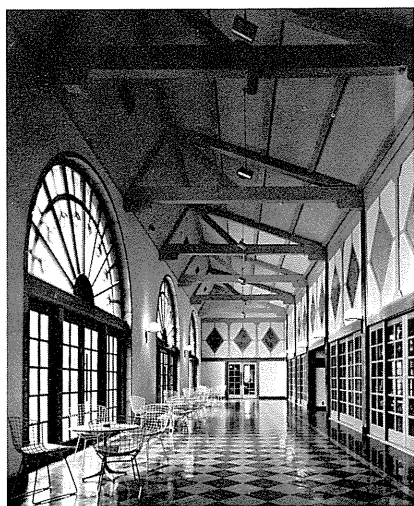
浦辺鎮太郎

同郷同年同窓（岡山一中、六高）の大原さん（總一郎——1909～1968）が“わが倉敷を地方のモデル都市にしよう”と私にその意志を伝えたのは晩年であった。愚直な私は日暮れて道遠しの感もあるがその意志を忘れたことはない。大原構想は雄大なもので、それを私は1 KM四方に限定している。碁で申せば天玄は鶴形山の阿智神社であり、四隅は一石を配した所もあり未着手の所もある。四辺は心理的城壁で結ばれている。現実という手強い相手の碁であるから漸く市民会館とアイビスクの一隅は納まったものの、こゝから天玄にどうつなぐか工夫をしている現況である。下手な考へ休むに似たりと申す通り、他の三隅は難局で倉敷中央病院の第一期工事が終った日は、考へ始めて5年たった。倉敷駅前再開発



地区の一隅は同じく5年たったがまだ着工に至らない。残る一隅に至っては人生という持時間一杯使っても実現に至るかどうか？

ゲルマン民族はブルグと称する城壁都市を造り、そこを運命共同体として自ら守り生活文化の華を咲かせて来たが、わが天領倉敷も発生・発展の過程で共通し



た市民（ブルジョアブルグの人）精神を育て、来た。市民の中心は大原家の人人であった。

石津謙介氏が『煉瓦建築があったからアイビスクエアになったのではなく、

背後の市民文化がそれを造ったのだ』と私に語った。その言は大にわが意を得た。こゝに來泊する主としてヤングの人々を観察した結果、自分の意志と自分の足で自由な水平移動が出来る必要最小限のデザインを楽しんでいる様子が感じられた。私共はその目的には物を建て、拘束するより建てないで行くやり方が大切だと当初から考えた。鋸屋根の部分を改装するよりも保存することが大切であり、また思い切ってそれさえ元の青天井に自然還元することの方がより大切だという考へ方であった。この様な素朴簡素なデザインに対してインテリアデザイナー協会賞を下さってありがたく頭上高く押しいたゞいた次第である。その時頭の隅に、“Aging”という言葉が去来した。

いう職業が網羅されている。目次だけでなく僅々10余ページにすぎない。

私はその目次を丹念に見た。職業という職業が50音順に勢揃いしているのも不思議なら、そのなかに私に出来る職業が1つもないのも不思議である。何かあろう、きっとあると私はひねくり回して、ようやく木工の部門を得たのである。

少年のころから、私には落伍者の自覚があった。だから電話帳のなかに、競争の少ない職業をさがしたのである。そしてこの部門に、ジャーナリズムがないことを発見したのである。

仔細に見るとこの世界にも新聞雑誌がないではない。けれどもそれらは、いやがる業者から広告を奪い、しかも自分はどこにも広告をしない所謂くもらい雑誌だとすぐ分った。いくら美しい雑誌でも、そこに忌憚のない言論がなければ、それは雑誌ではない。

だから、あとはむずかしくなかった。私は広告を強いることを禁じた。そして自分は新聞雑誌にひろく広告した。だから〈〇〇家具をこわしてみる〉〈評判はいいけれど〉〈似たもののデザイン〉など忌憚のない企画がいくらかでも実現できた。ジャーナリズムは模倣の世界だが、これらは模倣できない。模倣しようとする発想が生じなかった。

けれども、大新聞でさえスポンサーには属するという。〈室内〉が属しないのは感心だとほめてくれるかと思うと、そうでない。私の言うことは〈書生論〉で、書生論は実行できないからいいので、実行されては、それを実行しようともせぬ者にとっては迷惑である。それはほとんど悪事だと、20年たって、ようやく私はさとしたのである。その委曲はここに尽せないが、読者はすでにお察しのことと思う。

工作社——昭和26年創業、家具建具住宅の単行本を出版。昭和29年11月株式会社になる。同時に〈木工界〉を創刊（30年1月号）、昭和36年4月号から〈室内〉と改題して今日に至る。昭和50年8月現在248号。東京都港区芝琴平町29

〈室内〉由来

工作社社長

山本夏彦

——〈木工界〉を創刊してまる5年になる。歳月は勝手に来て、勝手に去る。このぶんならたちまち10年、また20年たつだろうと、私は〈木工界由来〉という短文に書いたことがある。〈木工界〉というのは〈室内〉の前身である。

はたして歳月は勝手に来て、10周年また20周年を迎えた。この種の雑誌でこんなになが続きするのはめでたいと、去る5月28日私はこの協会から特別賞を授与された。

ついてはこの雑誌の由来を述べよといわれたが、言うことはこの5周年のときの言葉に尽きている。それを〈室内由来〉にかえさせてもらう。

——私はもとこの業界のものではない。この業界ばかりでなく、他のいかなる業界のものでもない。しばらく編集に従事したが新聞雑誌の批判者で、よき編集者ではなかった。売文を事としたこともあったが、もとより操觚者ではなかった。



つまり何者でもなかったし、何者にもなれなかった者である。それが本誌を経営するに至ったのは、身すぎ世すぎのためである。

私は電話帳を愛読したことがある。初めて職業別電話帳が世に出たとき、私はその膨大な、書物ともいえぬ印刷物を茫然とながめた。ほとんど1行も読むところのないこの本の化物を、ながめてやがて気がついた。

すなわち、これはやっぱり画期的な書物なのである。このなかには人の職業と

研修委員会



去る6月6日、20日、7月4日の3回にわたって、研修委員会が開催されました。この研修委員会は、毎回異った3名のパネラーと参加する会員が、自由に発言討議する、パネルディスカッション方式を取り、次のような主旨で開催され、毎回多数の参加を得て、成功裡に終わりました。なお、この研修会の島崎委員長に、開催までのお話をうかがいました。

主 旨

社会は我々インテリアデザイナーに対して、さまざまなことを要求し、その行動を求めています。

戦後30年、社会の姿も、人々の生活に対する価値感も大きく変貌しようとしている今日、インテリアデザイナー及び日本インテリアデザイナー協会は、内的に、より充実を、外的に、より活潑な活動の基盤となる研修を重ねなくてはならないことは、今更云うまでもありません。

当研修委員会は、現在我々が直面しはっきりと認識し確認してゆかなければならない多くの問題の中より、インテリアデザイナーという職能人としての考え方、能力等の問題と、同じ分野を生業としている人々の集団としての職能団体のあり方の問題をもっとも基本的なテーマと考えて居ります。

—— 今回の研修会の開催の契期となったものは、島崎委員長が発案によるものがいましたが……

島崎 それは、あくまでも、私自身のきわめて個人的な体験と、発言からの、私が委員長に指名されたということについての、私自身の了解であって、きわめて個人的な感覚にしかすぎません。オフィシャルには研習委員会をつくるにあたって、理事会において島崎、委員長をやれ、と指名があっただけのことです。

—— 研修委員会をやるということになりましたのは……

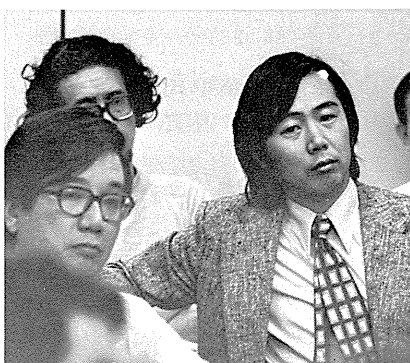
島崎 知りません。ずばりいえば。ただ研究会、および研究発表会も中に入れて、インテリアデザイナー協会の質的な向上を計るための、ことを考える、あるいは、行動する委員会をつくることが理事会で決定された。これを、裏がえしていいますと、ほかの委員会を含めて、委員会をつくるということと、委員長の指名ということがあったときに、それが、何故に委員会ができて、何故に誰誰を委員長にして、何を期待するかについては、きわめて不明確な伝達しか無いんですよ。で、私が、委員会においての発言のいちばん最初に申しあげたのは私自身の体験からそうじゃないかと、解しゃくをしていると、ということで、私は話をしたことです。それについて、どこからも反論がないと

ころをみると、そう自分自身では了解をして私自身は行動をした、ということになります。

—— 理事会からの依頼があって、研習委員会を、今回のような、3回に分けたパネルディスカッション方式でおやりになった狙いはどこにありますか……

島崎 それは、私自身の独断と偏見で、インテリアデザイナーとか、協会は、こんなじゃダメじゃないかと、前に発言していましたが、それを受けて、お前やれ、といわれたもんだらうと独断で解釈していますけど、今度個人の発言でなく、オフィシャルな行動をとらなければならないとすれば、ほかの協会たちには、現状は認でいいのかもしれない。ということが解らない。裏がえしていえば、この沈滞ムードにあること自身、原因というか、実体というものが、はっきりいって、どこでもつかめていない。それを私なりに、皮膚感覚として得てみたい。そして、それから実際のことはいろいろ考えよう、と考えたわけです。とすればいろいろなやり方があるでしょうが、実際に生な感じを得た方がいい。ならば、皆で集って、自由に発言できる場を設定して、その中から、次の行動を考えようとしたわけです。

—— 動員にご苦勞があったとききますが……



島崎 会員が集まるか集まらないかもデーターのひとつ。ですから、今回の私は私自身興味があった。私自身消極的な会員できましたので…。現在でも、会員たちの大部分と同じ心境でいたわけです。アウトサイダーとしての心情を持ちながら、逆に当事者になって動いてみるということで、一番楽しんだのが私ではないかと思っています。自分なりの予測と結果は勉強になりました。この結果報告については理事会への報告が済みましたのちに、みなさまにご報告をするようになると思います。

報酬規定について

中村圭介

建築家協会の報酬規定が独占禁止法に違反するのではないかと国会で質問され問題になったことは、ニュースその他で御存知の方も多いと思います。

同協会では、建築家の立場は営利法人と違い施主の依頼によって、その責任を果たすにふさわしい報酬を受け、施主と施工者の間に立って公平に行動をする、特殊法人になるのが、ふさわしいと主張しています。

これはわれわれフリーのインテリアデザイナーにとっても重要な問題であり、その動向を注目し、支持したいと思いますが、われわれの協会にも報酬基準があり、これも建築家協会の規定が独禁法にふれた場合には、同様な扱いを受けるのではないかと心配される方もいます。この点について、報酬基準作成委員会のメンバーとして作成にあたった私の見解をのべると次のようです。

1 報酬規定と報酬基準の違い

建築家協会は規定であるのに対しJIDは基準になっています。これは、関係官庁の御指導を受けたもので、業務内容と報酬を対置して考えその基準を決める姿勢になっています。

2 最低基準と基準の違い

建築家協会は最低基準と決めています。JIDの場合は基準です。従って設計料の確立は会員の皆さんの協力と個々のケースの積み上げによるもので、その基準を明示したものです。

3 算定方法

建築家協会では工事総額を算定基準とし料率による方式ですが、JIDの場合は、工事額算定・作業時間算定・実施権の売り渡し制・ローヤリティ制、の4種になっています。

これらは建築の場合と違う業務内容のために必然的に生まれた方式で、それだけにこの規定を正しく理解し、業務の内容によって最も適当な方式を選ぶ必要があります。

以上のような相違点から見て、JIDの場合、正会員の入会審査が公正に行われている限り独禁法にふれることはないというのが、私の当面の見解です。

住環境システム化 講演会について

吉永 淳

経済的で質のよい住宅の工法として工業生産化によることが認識されているがそれなりの欠陥も指摘されている。収納間仕切ユニット・ユニットパネルなどによるフレキシブルな部屋構成をすることで、インテリアで居住性を高め工業生産化住宅の不備を補うようなことも試みられ、インテリアのシステム化は重要な課題になっている。

講演会の話題の中心となっている収納間仕切ユニットはキャビネットタイプのユニット家具から発展した新しい家具である。それらは建築とインテリア・インテリアとIDの接点でありインテリア・IDデザイナー共に関心の高いものなので、講演会委員会としては始めてJID・JIDA共催で6月25日にプリジストンホールで講演会を行った。

ユニット家具を我が国に導入定着された先達であられた豊口克平氏のあいさつではじまり、千葉大教授小原二郎氏は住宅用収納間仕切りユニットのJIS化、住宅部品開発センターによるBL認定制度、教育開発機構の学校建築のシステム化などニュース的な話題を中心としてユニット家具のシステム化とその影響について話された。

東大生研教授池辺陽氏は住環境をシステム化するに際して注意しなければなら

ない事柄について話をされ結語とされた。

当日は共催でもあり講師が我が国の住環境のシステム化を推進されている方々なので聴講者が会員167名、(J I D・J I D A・B I S)一般41名、学生43名、計251名の盛況であった。

日本板硝子
千葉工場見学記

森谷延周

去る6月27日一行40名を乗せたバスは、千葉県姉崎の日本板硝子の工場へ向けて出発した。同乗案内の岡本徹馬氏からガラスに関する歴史、またその生産と輸出の現状等を中心に、わかりやすい講義を聞く。既に製品化されたガラス、現場に組み込まれたガラスはどんな工程を踏んで出来上ってくるのだろうか。車中で昼食をすませ、バスはPM1:30頃工場に着く。早速、工場の人から原料～製品に至るプロセスを図解と映画により聞く。この工場では、世界で最厚(19%)最大巾(3,600mm)のフロート板ガラスと普通板ガラス・型板ガラスを生産している。

一行は3班にわかれて工場に入る。工場の中は自動化され人影は余り無い。珪砂・ソーダ灰・苦灰石・芒硝が自動的に調合され、ガラスくずと混合、1500℃以上の高温で熱せられるという。熔解槽の周辺はまさにサウナに入っているようだ。体中からとめどもなく汗が出る。ロールマシンから徐冷窯を抜けたガラスは切り台のところで裁断される。ガラスの両端が一寸した仕掛により、割れて金属音をたてて下方に落ちる。様々の工程を目の当りに見た一行は工場から会議室に戻る。肌で掴んだ興奮をもとに、いろいろな角度から質問してみる。そして時間を惜しむようにしてPM3:30頃工場を出発、バスを東京に向けた。自分の目で確かめてみることは何にも増して大切と改めて思う。

商施連第4期商業施設士 資格検定試験の日程決る

中村圭介

商業施設技術団体連合会(商施連)では、第4期商業施設士資格検定試験を次の日程で実施することになった。

第一次試験—昭和50年11月30日

東京・大阪

第二次試験—昭和51年1月18日

東京

この資格制度は、商業施設の企画、設計および製作、施工に関する管理技術者の技術の向上と、その社会的責任を明らかにするために、わが国を代表する、関係職能団体の合意によって自主的に定められたものであり、この制度の運用にあたっては、通産・建設両省の指導と協力を受けています。

こんにち、商業施設の内装の設計、施工などを行なう場合は、建築や商業活動に関する基礎知識をはじめ、特殊建築物として、不特定多数の人々の防災安全を期さなければなりません。

そのような、社会的責務に答えるために設定した、商業施設士の資格はめまぐるしい社会の進歩に対応するよう3年間で資格更新手続をとるようになっております。

科目内容は次のようで、希望者を対象にした予備研修会(10月17日～19日)も開かれます。

第一次試験(基礎科目)

建築計画系・建築構造施工系・商業施設関連法規

第二次試験(実務科目)

商業施設計画原論系・商業施設一般構成計画系・商業施設製作施工系・商業施設設計製図

お問い合わせ先—〒102 千代田区六番町9(九番館)商業施設技術団体連合会 電話(03)261-8151

中村順平氏の インテリア業績

大泉博一郎

昭和の初頭から戦前迄の我が国のインテリア・デザイン史上に忘れてならぬものに、中村順平氏の20数隻にわたる客船公室の連作業蹟がある。

パリ美術院を卒業して、大正13年帰国すると直ぐ、横浜高工(現横浜国大)教授となり建築学科の創立に当たったが、日本の国立学校としては空前の無試験、アトリエ制24時間訓練、コンクール制進級を実施して、創造力の育成を目的に、学生の一人一人と心身をぶつけあつての、昼夜を分たぬ指導であつたので、生来の社交嫌いとも相乗して、生涯の建築作品がまことに少ないことが惜しまれるが、日本民族海外溢時の時勢の造船界の要望によって、次々と設計していった新造船室内が、僅々15年間に20数隻に及び。それが一貫した思想の連作となつていたことは、氏ならではの感を深くする所である。

その一貫した思想というのは“ネオ・ニッポン主義”即ち“世界の文化国家に伍して恥かしからぬ現代日本の生活文化を確立し、伝統を生かして日本独自の建築文化を創造する”ということに あつた。

この度、各方面からその設計図、デッサン写真等を集めてみると、終始一貫した主張を感じる中に、時代の推移、技術の変遷、体験の累積等に従つて“ネオ・ニッポン”の表現にも刻々の変化があり、その過程が手にとるようにわかつて、一人の作家の成長の軌跡が如実に読みとれるばかりでなく、創造探求の辛苦を汲みとることが出来るのである。

氏は日本建築をこよなく愛している。学生教育の課程にも日本の古典建築の研究を主題とした建築図画製作を必修とし、それによって建築の空間美学を体得する手段とした。

それらの学生の作品群は昨年5月小田急ハルク画廊をはじめとし、続いて大阪、広島、福岡、名古屋の各地で展覧され、現代の若い建築学生達に多大の感銘を与えた。

又、氏の著作、“建築という芸術”（初版は彰国社・絶版、再版相模書房・近刊）では日本古典建築を実証として建築芸術の原理を説いている。しかし同時に日本の建築芸術の欠陥を氏程痛感している建築家も少ない。

氏が常に最大の遺憾としているのは、日本の建築に大コンポジションの伝統がない、ということである。そのために国家的公式表現をもつべき建築が貧困きわまる様相を呈している。又日本人の建築観はあまりにも小味なところに低迷している。紙や竹や木目などの偏愛を断絶しなければ将来の日本建築の創造はできないという持論である。

日本の工芸美術についても、すべてその技巧は卓絶したものであるが、視野が甚だ小さく現代生活とあまりに隔絶している。現代にこれを生かすには、そのスケールを数十倍にしなければ、公的生活に対応するものとはならない、といって岩崎小弥太氏の食堂設計の時には24人用の大卓子を総漆臘色仕上げとし、飾棚（巾2.5m高2m）を黒漆仕上げ、四枚の真白な象牙張り扉をあけると、内部は朱塗銀砂子という、日本工芸史に特筆すべき大作を松田権六氏の技術協力によって創り上げた。日本郵船新田丸のロウンジでは天井迄高さ3mの周壁を薄肉彫刻とし、それを脱乾漆で仕上げた。これも松田氏と山崎覚太郎氏の技術協力で実現した。

只これら陸上の作品も船内の作品もすべて太平洋戦争の犠牲となって消失し、今は一つも残っていない。創作時の熱気に満ちたデッサンと竣工時の写真とによって偲ぶ他ない。“まぼろしのインテリア”になってしまった。

今秋、その展覧をする筈で、この稿もその予告のために書いたのだが、止むを得ない事情で一時延期することになった。

いずれ近い内に見て頂く機会を持つことをお約束する。

中村順平氏は生涯独身今年89歳。念頭にあるのは、只建築芸術のことのみである。

故・後藤勝男氏を悼む

黒野敬三

後藤勝男氏（中部事業支部正会員）はかねて名大病院に入院、療養中のところ、8月19日逝去されました。

慎んでご冥福をお祈りいたします。享年69歳。氏は明治38年愛知県一宮の生れ。京都高等工芸図案科（現京都工芸繊維大学）の卒業にて、昭和4年誠工舎に入社、最初名古屋誠工舎の設計部を振り出しに昭和15年37歳にて大阪誠工舎支配人、その後戦争の激しくなると共に昭和18年、騎兵士官として応召、中支戦線にて負傷、昭和20年、会社に復帰すると同時に東京誠工舎支配人に着任。後東京にて常務取締役となる。東京在勤中は主都著名な建物の家具内装工事を手掛け名声を博した。昭和33年名古屋に着任して専務取締役として、会社を統括、度々苦難の場に立たされたこともあったが、たまたま高度成長の時期には業績の向上に尽され今日の業界における、誠工舎の地位の確立に貢献をされた。

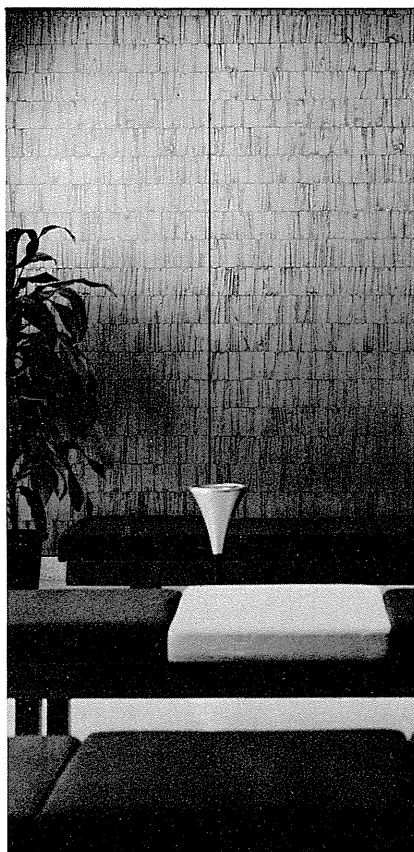
経営者として日夜会社の運営に努力される一方、デザイナーとしての真摯な精神をもって製品の形、質の向上にも仲々うるさく、時々鉛筆を持って図面を引いておられる姿もしばしば見受けられた。昭和42年会社をお辞めになってからは日本デザイナー学院教授として若い学生の技術教育に意をつくされた。若い人達の面倒をよく見られ、又若い人達も氏の人柄を慕ってお宅にもよく顔を出していた。そうした人達の中から、現在当協会のメンバーとして第一線に活躍しておられる

著名なデザイナーも十指に余る筈である。又余技として知人ぞ知る、“釣り”に関しては古くから造詣深く特に“溪流釣り”においては名人の域に達しておられた。いずれにしても中部において重要な人材を失った事はおしみて余りある。

後藤勝男氏へ

横田真利

お山の様な方——始めてお目にかかった時の印象。先輩と云っても18年の距離はかなり遠く畏敬をもって接しさせて頂きました。以後九年間同じ学校で教鞭をとらせて頂きましたが、第一印象通りすじ道のはっきりした方で理非曲直が明快でした。私も自分にない素晴らしいものがほしくて心から私淑しておりました。剛快な面では授業中に何度となく雷が落ちた様ですが、又一面親身になって学生達の世話をなされ、就職から縁談等まで面倒を見ておられました。必然的に学生達からの人望も高く、ご葬儀の際に不十分な連絡にも拘らず、卒業生、在校生が数十名馳せ参じ涙乍らに別れを惜しんでおりました。さぞかし先生も彼方から温顔をほころばせて眺めていられた事と存じます。又堅い反面大変なユーモリストでよく私共を笑わせ、お好きなアルコールが入れば、さびのきいた喉で“海賊の唄”等を披露され、未だ耳朶に残っている思いです。仕事に対する若々しい情熱、永年の貴重な体験と新知識の吸収に対する真剣な努力の厚い積み重ねから語られるお話しの数々が朗々たる音声にのって流れ、何時も私などは引きこまれていたが——その先生は今やなし。本当に、もっと種々と教えて頂き、又もっともっと活躍して頂きたかったのに——。残念と云うだけではすまない何か重いものが心の中に遺っております。



新しいインテリア時代を創る工芸化粧板
ブロンズの気品と格調

デコリアル

dekorial

新発売

日本鋳業株式会社

お問い合わせカタログ請求
〒170 東京都港区赤坂 3
開発本部企画開発室まで
電話03(582)2111

■賛助会員

朝日木工(株)豊川工場
(株)コスガ
(株)天童木工東京支店
飛騨産業(株)
富士ファニチャー関西販売(株)
ネコス工業(株)
古川工業(株)
(株)ホウトク
フランスベッド(株)
(株)オリエンタル中村百貨店
(株)大丸装工部
国際インテリア(株)
(株)モダン・ファニチャー・セールス
日本総業(株) (エアボン)
クラレインテリア(株)
(株)ホクサン
(株)木利屋
三好木工(株)
愛知(株)
(株)コトブキ
(セミカインテリア

住江織物(株)東京支店
トーソー(株)
長谷虎紡績(株)
藤井毛織(株)東京事務所
内一商事(株)東京営業所
(株)カワキチ
(株)サンゲツ
アイカ工業(株)
東洋ゴム工業(株)
富国(株)
(株)高島屋
(株)高島屋東京支店設計部
(株)ニック (N I C)
(株)ハヤミズ家具センター
揖斐川電気工業(株)建材事業部
(株)トップトーン
(株)佐野紙芸インテリア事業部
東濃陶器(株)
(株)アイ・ユム・エス
(株)日建設計
(株)カフアドハウス
(株)竹中工務店東京支店

(株)ファースト東京支社
(株)商園
(株)小川商店
(株)川島織物東京営業所
(株)東光堂書店
松下電工(株)
ヤマギワ電気(株)
共同通信工業(株)
(松坂屋 (株)松坂屋
(株)新宮商行東京支店
(株)フジエキスタイル
(株)アルフレックスジャパン
中央設備エンジニアリング(株)
日本ビクター(株)デザイン部
内外木材工業(株)東京支店
同社東京支店分室
(株)三平興業装飾部
共同印刷(株)
(株)ハック
鹿島建設(株)建築設計本部
山田照明(株)
(株)森 伝

(有)ビジュアルブレン
(株)武藤精密
(株)海 市
浅野産業(株)
MAAM INTERIOR
寿屋木工(株)
昭和エフキヤット(株)
ロイヤル(株)
(株)西武百貨店家具装飾部
西和インテリア(株)
(株)北新合板製造所
ユニオン装備工業(株)
日本板硝子(株)東京支社
帝人リビングシステム(株)
(株)カスタムインテリアデザイン
ワコールインテリアファブリック事業部

■編集後記

■夏過ぎて秋。むし暑かった夏にも、各委員会それぞれに趣向をこらして実践。多くのレポートを頼みながら、ここによよう発行。そのたびに考えるこれからの広報の在り方か。
■紅葉の秋。人は皆、山に行き里に帰って、その自然を楽しむ。わが会報もつとに発行のたびに原点を行き帰りしているような隔靴搔痒のもどかしさ。
■月日は百代の过客とか。過ぎ去りて始めて、その重かつ大なるを知るような……今日の状

況の中にあつて、真に人間のためのデザインとは奈辺にあるかを。然るに、時には行雲流水、時うつるをながむるも妙なりか (尾上)

会報委員 [東京] 尾上孝一 三宅征郎 光藤俊夫
山岸征史 長谷川六 諸富顕治
[関西]
[中部] 林 寅正 八代美代子
宇賀敏夫 安藤 清
[九州] 中川千年 香月寿一 堤 久夫

機関誌・JID NO.71

発行人——白石勝彦
担当理事——川上信二
編集人——J I D会報委員会
発行所——社団法人日本インテリアデザイナー協会
住所——〒150 東京都渋谷区神宮前2-3-16
建築家会館3階
電話——03(403)3649
発行日——昭和50年10月
印刷所——広洋印刷株式会社
定価——300円
振替——東京・76389